

議会に女性がいることの大切さ みんなの声が届く中富良野町議会に

二〇一七年春に中富良野町議会議員となつて、三回目の冬を迎えました。

議員定数は一〇名、うち女性ひとり、四〇代以下も私ひとり。同期もおらず、保守的な雰囲気の中で、ネットで瞬時に情報が取れたり、世界中の誰とでも繋がれる現代のライブ感覚や、女性ならではの視点を持ち込む難しさを感じながら、試行錯誤の日々です。

「孤育て」に苦しんだ経験から、当事者同士が情報共有し共感しあえる場や、地域で繋がりを育てることの大切さを痛感し、母親仲間とNPO法人を設立しファミリー・サポート事業を運営したり、自主保育で互いに子ども達を預かり合う「森のようちえん」を運営したりと、様々な活動をしてきた私に、地域の先輩議員から、後継として議員にならないかと、声を掛けられたことからすべりは始まりました。

当時の私は議場がどこにあるのかすら知らず「議員なんて無理無理!」とお断りしました。けれど、女性が一人もいない議会が良いのだろうか?と自問自答し、心機一転、当事者感覚を持ち込んで、みんなの声が届く議会にしていこう!と挑戦することを決めました。

選挙では、母親仲間や女性達が全面協力、自由に柔軟な女性の視点で選挙活動をすすめました。例えば、選挙ポスターを「ぬりえ」にしてみんなの色をぬったり。男性も「農作業が忙しい時期だ

から出番が少なくて助かる」と必要最小限のサポートで女性を中心に動いた選挙。いろいろな声はありましたが、結果、同率二者トップの票を獲得し、町民の期待もすっかりと背負うことができました。

保守的だと感じていた町でしたが、今までとはまったく違う一風変わった選挙運動も肯定的に受け止めて、むしろ後押ししてくれる風を感じました。

初めての常任委員会で、子育てに関する事業や施策について議題に出されることもなく終了していくことに驚きました。

もしかしたらこれまで関心を持たれることがなかった分野なのかもしれない、と思うと、女性が議会に存在することはとても重要で不可欠なことと感じました。

その後、子ども・子育て支援に関する事業について、担当課に資料も用意してもらい、他の議員にも現状の説明を聞いてもらう、という、ほんとは小さなところから私の議会改革は密かに始まりました。

みな、決してどうでもいいと思っていたわけではないと思うのですが、やはり、当事者でないとはわかんないこと、気づかないことはたくさんあります。

だからこそ、女性やマイノリティが議会に席を置く必要性があること、できれば人口比と同じ割合

合になることの重要性を訴えていきたいと思いますが、現在の町の状況で声高に訴えても共感を得るどころか反感を持たれてしまうリスクのほうが高い。まずは、子どもや女性を取り巻く現状を知ってもらおう、共感を得る、ここに重点をおいて議員活動をすすめています。

私が入った当初、「議会改革」に対して他の議員から肯定的ではない声がかえっていました。大変驚きましたが、それがわが議会の現状。そこで長野県飯綱町の議会改革のドキュメンタリー本『地方議会を再生する』（集英社新書）を先輩議員に手渡し、少しずつ共感を得ることで、議会活性化特別委員会を発足することができました。でも、なかなか思うようには進まず、かといって私が引張っていくほど力はないので、ならば、ほんの少しずつでも話せるところから、ということ、今年度、議会広報発行特別委員会ではまず町民に「議会だよりアンケート」を配布。より身近に感じてもらえる分かりやすい「議会だより」へと改革する道なので、議員間討議すらままならず「個々」だった議会を「チーム」として機能するように改革すべく取り組んでいます。

また、「住民自治」の感覚を育てていくため、まずは周りの女性を中心にお声掛けし、議会を身近に感じてもらえるような町民とのコミュニケーションの場として、まちづくり女子会「チームいどばた」というライングループを作って、町に関する情報共有や意見交換、自主勉強会を企画して、いつでも気軽に話ができる場でのコミュニケーションもすすめています。

「議会改革」というとおこがましい限りですが、私ができる最善最大限を探しながら、少しずつその歩幅を広げていきたいと思っています。

へたらおか ゆうこ・中富良野町議会議員